

## 小説『繁花』のドラマ化：虚無から「大きな物語」へ

一橋大学言語社会研究科言語社会専攻  
賈 海濤

金宇澄の長編小説『繁花』は、筆者が学部4年生の頃から研究対象としてきたもので、昨年提出した博士論文の中でも一章を割いてこの小説を論じた。この作品は、ここ数年の中で上海語の方言語彙を取り入れた有数の小説であるだけでなく、戯曲・舞台劇・ラジオドラマやテレビドラマなど様々な文芸様式に改編され、広く注目されている文学作品でもある。金宇澄自身は絵を描くことが好きで、小説の中に多くの手描きのイラストを取り入れ、近年は各地で個展を開き、画集を出版するなど、すでに画家と言えるほどになっている。

2024年1月、ウォン・カーウアイ監督のドラマ『繁花』が中国大手の動画配信プラットフォームである Tencent Video で放送され、大きな反響を呼んだ。近年中国本土で高品質のドラマが非常に少ない現状の中で、その質と影響力の高さは否定できない。ただし、『繁花』の「素晴らしさ」は、監督であるウォン・カーウアイの一貫した高水準の撮影によるものであり、原作の物語を上手く翻案した「素晴らしさ」ではなかった。このドラマが放送された後、原作の研究者としてメディアでレビュー記事を執筆しようと考えたが、このドラマの内容は原作の物語をほとんど踏まえ、人物設定や背景の一部を借りただけで、全く新しい物語とも言える。

原作の『繁花』は、1960年代から1970年代の文化大革命期、そして1980年代以降の経済成長の時代という二重のタイムラインで交互に語られることが特徴とされる。特に文化大革命期の物語が高く評価された。その中で、上海で育った主人公のひとりである少年時代の阿宝は、ブルジョア階級家族の出身で、上海の旧フランス租界にあった西洋風の家屋に住んでいた。文化大革命の階級批判によって家財が没収され、幼馴染の女友達も家政婦も姿を消した。阿宝の家族は上海近郊の労働者階級向けの団地に強制的に引っ越しさせられ、プライバシーのない生活を余儀なくされた。その経験は、後で貿易に携わる阿宝の虚無感を持つ恋愛観や人生観に大きな影響を与え、1980年代の物語における彼の言動を理解する上で不可欠な背景といえるだろう。

しかし、ドラマ『繁花』は、文化大革命期のタイムラインをほぼ削除した、阿宝は単に経済成長期の発展を追い風に、対外貿易で最初の資金を稼ぎ、成功して株式投資に進出する商人というルーツがない人物像として描かれている。この人物像の背後には、中国の改革開放政策や1990年代の上海浦東開発政策の実施により、中国社会全体が急速な発展を迎えようとした大きな物語が含まれている。このような大きな物語へ賛歌を捧げる傾向が強く感じられる。これは、原作における1990年代というタイムラインが具体的な歴史事件や時代背景を意図的に隠しながら、登場人物たちが食事会をする場面を次々と描き、物語の筋が不明瞭なまま虚無的な終わりを迎える流れとは大きく異なっている。

小説のドラマ化では、必ずしも原作の物語を忠実に再現するわけではないが、原作で最も評価の高い

部分が削除され、核心となる虚無感が国家発展を背景にした物語に変えられてしまうと、そのドラマは「全く新しい作品」として認識されていると言ってもよいだろう。ドラマ『繁花』のような高品質な作品は稀にしか見られないが、中国経済の発展と社会の進歩を伝えようとする公式の「主旋律」を謳うものは、決して稀なものではない。